論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号

氏　　名　　佐々木　稔

論　文　題　目

第二共和政下におけるボードレールの詩学
――挫折した詩集『冥府』を通して――

論文審査担当者

主査　名古屋大学教授　松澤和宏

委員　名古屋大学教授　中村靖子

委員　名古屋大学准教授　重見晋也

委員　大阪芸術大学教授　山田兼士

論文審査の結果の要旨

［本論文の概要］

本論文は、『悪の華』で知られる十九世紀の詩人シャルル・ボードレールが、第二共和制（1848—51年）の時期に計画していた韻文詩集『冥府』の詩学の体系的な研究である。「『冥府』からの抜粋」として発表されたものは1850年6月の『家庭画報』誌に発表された二詩篇と1851年4月の『議会通信』紙に発表された十一の詩編であり、本論文の第一部は前者を扱い、第二部は後者を扱っている。

第一部では、「驕慢の罪」と題された詩篇に関して、サン＝ルネ・タイヤンディエという学者の論文をボードレールは参照したが、この学者とは反対にプルードン的社会主義に同調していることが明らかにされている。もう一つの詩編「まじめな人々の葡萄酒」に関しては、日々の労苦で疲弊した労働者と葡萄酒との幸福な結びつきから詩が生まれることを主題としているという解釈が提示されている。二つの詩篇はともに美学的観点と社会道徳的観点との結びつきを示すものであり、美の自律性を説く後年のボードレールの立場とは大きく異なっている点を論者は重視している。1851年3月の『議会通信』紙に掲載された「葡萄酒とハシッシュについて」と題された記事では、葡萄酒とハシッシュがともに超自然的な無限への志向を孕む陶酔をもたらすという点で芸術的理想と重なる面があるものの、「天国を一挙に奪い取」ろうとする過激な暴力と意志の衰弱をもたらすハシッシュは道徳的観点から否定的に捉えられ、日々の労働と結びついた葡萄酒は逆に肯定的に論じられている。芸術の理想と社会道徳との統合を目指す陶酔の詩学こそがこの時期の詩学を示しているものであることが第一部の結論として確認され強調されている。

第二部は、『議会通信』紙に掲載された十一篇が有機的な構造性をもって配列されていることを明らかにしている。プロローグとしての「憂愁Ⅰ」は、倦怠が極端に昂進した状態としての憂愁の世界を表象し、人格を持ったものが人格を失い、事物が逆に人格を持っているかのような超自然的世界の様相を呈するが、これは陶酔状態と重なる面があり、陶酔の詩学と『冥府』の基調をなす憂愁との結びつきを示していると論者は解釈している。第二詩篇「不徳の修道僧」から「理想」、「憂愁Ⅲ」を経て第五詩篇「猫たち」に至る詩篇を論者は「理想」詩群と呼び、そこでは「力強さ」を伴った芸術的理想のイメージが示されていると解釈する。第六詩篇「芸術家たちの死」と第七詩篇「恋人たちの死」はともに死を扱った「死」詩群であり、理想と死との間の緊張関係が弁証法的に示されていると解釈されている。第八詩篇「憎しみの樽」、第九詩篇「浄福をもたらす女」、第十詩篇「憂愁Ⅲ」では、絶望的な状態に陥った主体がなお弱々しい力で理想の形象を求め続けていることから、論者は「絶望」詩群と名付けている。最後の第十一詩篇「木菟たち」では「赤い目」をした木菟たちが、こうした冥府の世界を見つめ続け、理想追求をじっと瞑想的姿勢で見守りながら、「移ろう影」に「酔う」ことが懲罰をもたらすという認識を無言のうちに教えている。それは自らの理想を失

論文審査の結果の要旨

った芸術家たちが追従する公衆の人気や民衆を扇動するデマゴーグたちの提示する「万能薬」である、と論者は解釈する。こうして、「現代青年の精神的動揺の歴史」を主題とした『冥府』関連詩篇とは、自らの理想を求め続けたロマン主義以来の青年たちの精神史の記述なのである、と論者は結んでいる。

［本論文の評価］

本論文は以下の点で高い評価に値する。

第一に、厖大なボードレール研究史において、『冥府』は後年の『悪の華』へ至る前段階の挫折した試みとして捉えられてきたために、言及されることはあっても、それ自体として体系的な研究はなされてこなかった。本論文はこの欠落を埋める初めての本格的な試みであり、夥しい量の文献を渉猟して論を進めており、これまで指摘されてこなかった『冥府』関連詩篇を支えている詩学を明らかにすることに成功している。この時期のボードレールの詩学が、美の価値の自立性を説く後年の詩学と大きく異なり、社会道徳と芸術的理想との結びつきを重視していた点は、従来のボードレール像に再考を迫るものである。

第二に、『議会通信』紙に発表された十一編の詩群が「現代青年の精神的動揺の歴史」を主題として、相互に有機的に関連づけられた構造をなしていることを緻密に実証した点は高い評価に値する。本論文によって『冥府』関連詩篇が『悪の華』とは異なった主題と構成を持っていたことが初めて具体的に明らかにされた。

第三に、本論文は、『冥府』関連詩篇の詩学や構成の点に加えて、個々の詩篇の細部にわたる解釈においても瞠目すべき指摘が少なくない。とりわけ最後の詩篇「木菟たち」における「赤い目」をしてじっと凝視している木菟たちの瞑想的姿勢を「現代青年の精神的動揺の歴史」と関連づけて読み解いた点は、『冥府』のエピローグとして捉えることによって初めて可能となった独創的でかつ説得力のある解釈である。こうした解釈は『悪の華』の文脈においても検討可能であるが、これまでに木菟たちの瞑想的姿勢を掘り下げて解釈した先行研究は存在しなかった。

もっとも本論文にも問題点がまったく見あたらないわけではない。出典不明箇所が若干見られることもその一つだが、より広範な問題として、本論文では、第二共和制下の詩学の解明に主眼が置かれているために、後年の詩人の詩学との関連に踏み込んだ考察は十分にはなされていない。『悪の華』や『パリの憂愁』を含む詩人の創作活動の全体のなかにこの第二共和制下のボードレールの詩学を位置づけるという課題が残されている。また詩人のカトリック的精神世界の理解がやや不十分な点もある。しかしながら、このような点は、今後時間をかけて取り組むべき研究課題ではあっても、本論文の評価をいささかも損なうものではない。

よって、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位に相応しいと判定した。